上村松園展

《序の舞》（部分） 昭和11（1936）年 重要文化財
東京藝術大学蔵 ※前期

珠玉の名画を京都で

2010年11月2日㊋―12月12日㊐

前期：11月2日～23日 後期：11月25日～12月12日

京都国立近代美術館［岡崎公園内］

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は閉館の30分前まで）

休館日：毎週月曜日（ただし11月22日は開館）、11月24日［水］

主催：京都国立近代美術館、日本経済新聞社、京都新聞社　後援：テレビ大阪

協賛：旭硝子、NEC、トヨタ自動車、日興コーディアル証券、日本興亜損害保険

上村松園展

2010年11月2日(火)—12月12日(日)

前期：11月2日～23日　後期：11月25日～12月12日

明治八（一八七五）年京都の四条御幸町辺りで葉茶屋を営む家に生まれた上村松園は、幼い頃から絵を描くことを好み、京都府画学校に入学すると共に、同校の教師でもあった鈴木松年の画塾に通い始めます。翌年師・松年が画学校を退職したのに伴って同校を退学し、正式に入門しますが、師の得意としない人物画を描くことを望み、許可を得て、幸野楳嶺に師事、二年後に楳嶺が没すると、その弟子である竹内栖鳳に師事します。三三年《花ざかり》が第九回日本絵画協会・第四回日本美術院連合絵画共進会において銀牌となったのをはじめ、日本絵画協会や新古美術品展で活躍、文展が開設されてからは、主に官展系の展覧会で活躍しました。

《花がたみ》《草紙洗小町》等和・漢の古典や謡曲に取材したもの、《待月》《天保歌妓》等徳川時代の風俗によるもの、《夕暮》《晩秋》など市井の女性の日常に取材したものなど、品格の高い女性像を描き、昭和二三（一九四八）年には、女性初の文化勲章を受章します。

本展は、初期から絶筆までの代表作約八〇点と素描によってその画業を紹介するもので、時代順に「画風の模索、対象へのあたたかな眼差し」「情念の表出、方向性の転換へ」「円熟と深化」の三章に分けて珠玉の名画を展示いたします。

松園の代表作でありながら東京に所蔵されているため、関西では見る機会の少ない《焔》《雪月花》《序の舞》《砧》が、松園芸術を育てた京都の地で見られる貴重な機会を、どうぞお見逃しなく。

※作品によって展示期間の制限があり、《焔》《雪月花》《序の舞》《砧》の四点が揃って同時に見られることはありません。

一章　画風の模索、対象へのあたたかな眼差し

《人生の花》明治32（1899）年　京都市美術館蔵

《長夜》明治40（1907）年

二章　情念の表出、方向性の転換へ

《花がたみ》大正4（1915）年　松伯美術館蔵

《焔》大正7（1918）年　東京国立博物館蔵　※後期

Image: TNM Image Archives Source: http://TnmArchives.jp

《待月》大正15（1926）年　京都市美術館蔵　※後期

三章 円熟と深化

三章－一◆古典に学び、古典を超える

《草紙洗小町》昭和12（1937）年　東京藝術大学蔵　※後期

《砧》昭和13（1938）年　山種美術館蔵　※前期

三章－二◆日々のくらし、母と子の情愛

《母子》昭和9（1934）年　東京国立近代美術館蔵

《夕暮》昭和16（1941）年　京都府立鴨沂高等学校蔵

《晩秋》昭和18（1943）年　大阪市立美術館蔵

三章－三◆静止した時間、内面への眼差し

《待月》昭和19（1944）年　足立美術館蔵　※前期

《静思》昭和21（1946）年　大松美術館蔵

〈舞仕度〉大正3（1914）年　京都国立近代美術館蔵

上村松園展

UEMURA Shoen

観覧料	当日	前売	団体
一　般	1300円	1100円	900円
大学生	900円	800円	600円
高校生	400円	300円	200円

※団体は20名以上　※中学生以下無料
※心身に障がいのある方と付添者1名は無料（入館の際に証明できるものをご提示ください）
※本料金でコレクション展もご覧いただけます。
※前売券はチケットぴあ（Pコード：764-328）、ローソンチケット（Lコード：59824）ほか主要プレイガイド、コンビニエンスストアなどで販売
※着物でご来館の方は団体料金でご入場いただけます。（他の割引との併用はできません）

◆記念講演会

11月6日(土) 午後2時－3時30分
「上村松園のもとめた世界」
上村淳之氏 日本芸術院会員・日本画家
会場：京都国立近代美術館1階講堂
定員：100人（聴講無料、要申込）
申込方法：参加希望者1名につき1枚の往復はがきでお申し込みください。応募多数の場合は抽選。往復はがきに住所、氏名（返信面にも）、電話番号を明記のうえ、〒540-8588　大阪市中央区大手前1-1-11　日本経済新聞社企画事業部「上村松園展講演会係」にお申し込みください。10月22日(金)締切（当日消印有効）

11月12日(金) 午後2時－3時30分
「上村松園―その人と芸術」
尾崎正明 京都国立近代美術館長
会場：京都国立近代美術館1階講堂
定員：100人（聴講無料、当日午前11時から受付にて整理券を配布します）

◆関連イベント

11月6日(土) 午前11時－12時30分（開場は10時30分）
特別文化講座
「序の舞について　お話と実演」
金剛永謹氏 金剛流宗家
主催：財団法人金剛能楽堂財団
会場：金剛能楽堂（京都市上京区烏丸通中立売上ル）
料金：2000円（「上村松園展」観覧券付き）
定員：400人（先着順）
お問い合わせ：金剛能楽堂（電話：075-441-7222、月曜除く午前9時～午後5時）

11月18日(木) 午後2時－3時30分
特別文化講座
「松園の描いた髪型　お話と実演」
講演・解説：猪熊兼勝氏 京都橘大学名誉教授
結髪・衣紋：南　登美子氏 有職美容師
会場：京都国立近代美術館1階講堂
定員：70人（聴講無料、当日午前11時から受付にて整理券を配布します）

京都国立近代美術館

［岡崎公園内］
〒606-8344
京都市左京区岡崎円勝寺町
電話：075-761-4111
テレフォンサービス（展覧会のご案内）：075-761-9900
ホームページ：http://www.momak.go.jp
展覧会ホームページ：http://shoen.exhn.jp/

交通案内
●JR・近鉄京都駅前（A1のりばから市バス5番岩倉行「京都会館美術館前」下車すぐ
●JR・近鉄京都駅前（D1のりばから市バス100番（急行）銀閣寺行「京都会館美術館前」下車すぐ
●阪急烏丸駅、河原町駅、京阪三条駅から市バス5番岩倉行「京都会館美術館前」下車すぐ
●阪急烏丸駅、河原町駅、京阪祇園四条駅から市バス46番平安神宮行「京都会館美術館前」下車すぐ
●市バス他系統「東山一条」または「京都会館美術館前」下車　徒歩約5分
●地下鉄東西線「東山」駅下車　徒歩約10分
●お車でお越しの場合、岡崎公園駐車場（地下）をご利用の有料入館者は駐車場の割引（1台1名）を受けられますので、駐車券をお持ちのうえお越しください。

関西から文化力 POWER OF CULTURE

№ 235337

入場券

コレクション
ギャラリー

非売品

当日限り

The National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館

入 場 券

入館日時
22.11.23
京都国立近代美術館

UEMURA Shoen

上村松園展

2010年11月2日(火)—12月12日(日) 京都国立近代美術館

〈出品リスト〉

＊展示期間　空欄：全会期／前期：11月2日-11月23日／後期：11月25日-12月12日
＊都合により、出品作品に変更が生じる場合があります。

作品番号	題名	制作年	所蔵先	展示期間
1章　画風の模索、対象へのあたたかな眼差し				
1	四季美人	1892(明治25)年頃	光記念館	
2	清女褰簾之図	1895(明治28)年	財団法人 北野美術館	
3	義貞勾当内侍を視る	1895(明治28)年		
4	一家団欒	1897(明治30)年		
5	人生の花	1899(明治32)年	名都美術館	後期
6	人生の花	1899(明治32)年	京都市美術館	東京会場のみ展示
7	人生の花	1899(明治32)年	京都市美術館	
8	軽女悲離別図	1900(明治33)年		
9	蜃気楼	1900(明治33)年頃		前期
10	粧	1900(明治33)年頃		
11	浴後美人	1900(明治33)年頃		
12	四季美人図	1900(明治33)年頃	出光美術館	2幅ずつ展示
13	よそほい	1902(明治35)年頃	福富太郎コレクション資料室	
14	時雨	1902(明治35)年頃		
15	春の粧	1903(明治36)年	総成カントリー倶楽部	
16	しゃぼん玉	1903(明治36)年頃		
17	長夜	1907(明治40)年		
18	虫の音	1907(明治40)年頃		
19	虫の音	1908(明治41)年	大松美術館	
20	花見	1910(明治43)年	松伯美術館	
21	人形つかい	1910(明治43)年	松伯美術館	
22	花	1910(明治43)年	姫路市立美術館	
23	雪吹美人図	1911(明治44)年	財団法人 ウッドワン美術館	
2章　情念の表出、方向性の転換へ				
24	納涼美人図	明治末期		
25	蛍	1913(大正2)年	山種美術館	
26	化粧の図	1913(大正2)年頃		
27	娘深雪	1914(大正3)年	足立美術館	東京会場のみ展示
28	舞仕度	1914(大正3)年	京都国立近代美術館	

作品番号	題　名	制　作　年	所　蔵　先	展示期間
29	楚蓮香	1914(大正3)年頃		
30	朝	1914(大正3)年頃		
31	花がたみ	1915(大正4)年	松伯美術館	
32	お万の図	1915(大正4)年	名都美術館	前期
33	焔	1918(大正7)年	東京国立博物館	後期
34	楊貴妃	1922(大正11)年	松伯美術館	
35	梅下佳人	1924(大正13)年		
36	楚蓮香之図	1924(大正13)年頃	京都国立近代美術館	前期
37	娘	1926(大正15)年	松伯美術館	
38	待月	1926(大正15)年	京都市美術館	後期
3章　円熟と深化				
3章－1　古典に学び、古典を超える				
39	伊勢大輔	1929(昭和4)年		
40	美人納涼	1932(昭和7)年頃		
41	天保歌妓	1935(昭和10)年		
42	春苑	1935(昭和10)年	島田市博物館	後期
43	汐くみ	1935(昭和10)年頃	大阪市立近代美術館建設準備室	
44	春宵	1936(昭和11)年	松岡美術館	東京会場のみ展示
45	春宵	1936(昭和11)年	奈良県立美術館	
46	雪月花	1937(昭和12)年	宮内庁三の丸尚蔵館	11月2日–11月14日
47	草紙洗小町	1937(昭和12)年	東京藝術大学	後期
48	砧	1938(昭和13)年	山種美術館	前期
49	菊寿	1939(昭和14)年頃	東京富士美術館	前期
50	美人書見図	1939(昭和14)年頃	吉野石膏株式会社	
51	冬雨	1940(昭和15)年		
52	花に詠ず	1941(昭和16)年		
53	円窓美人	1943(昭和18)年頃		東京会場のみ展示
54	静	1944(昭和19)年	東京国立近代美術館	
55	古代汐くみ	1944(昭和19)年		
3章－2　日々のくらし、母と子の情愛				
56	虹を見る	1932(昭和7)年	京都国立近代美術館	11月16日–12月12日
57	新蛍	1932(昭和7)年	松伯美術館	
58	青眉	1934(昭和9)年	吉野石膏株式会社	
59	母子	1934(昭和9)年	東京国立近代美術館	
60	春粧	1935(昭和10)年		
61	鴛鴦髷	1935(昭和10)年		
62	秋の粧	1936(昭和11)年	西宮市大谷記念美術館	前期
63	春雪	1937(昭和12)年	大松美術館	
64	灯	1937(昭和12)年	出光美術館	後期
65	初雪	1937(昭和12)年		前期
66	春	1938(昭和13)年		
67	雪	1939(昭和14)年		
68	風	1939(昭和14)年	財団法人 北野美術館	
69	櫛	1940(昭和15)年		
70	晴日	1941(昭和16)年	京都市美術館	後期
71	夕暮	1941(昭和16)年	京都府立鴨沂高等学校	
72	晩秋	1943(昭和18)年	大阪市立美術館	
73	牡丹雪	1944(昭和19)年	足立美術館	前期
3章－3　静止した時間、内面への眼差し				
74	新蛍	1929(昭和4)年	山種美術館	東京会場のみ展示

作品番号	題　名	制　作　年	所　蔵　先	展示期間
75	簾のかげ	1929(昭和4)年頃	財団法人 セゾン現代美術館	
76	夕べ	1935(昭和10)年	山種美術館	
77	序の舞	1936(昭和11)年	東京藝術大学	前期
78	朝ぞら	1937(昭和12)年		
79	鼓の音	1938(昭和13)年		
80	鼓の音	1940(昭和15)年	松伯美術館	
81	わか葉	1940(昭和15)年	名都美術館	後期
82	賞秋	1942(昭和17)年		
83	新蛍	1944(昭和19)年	東京国立近代美術館	
84	待月	1944(昭和19)年	足立美術館	前期
85	静思	1946(昭和21)年	大松美術館	
86	庭の雪	1948(昭和23)年	山種美術館	東京会場のみ展示
87	若葉	1949(昭和24)年頃		
88	初夏の夕(絶筆)	1949(昭和24)年		
附章　写生に見る松園芸術のエッセンス				
S1	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	後期
S2	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	後期
S3	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	前期
S4	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	後期
S5	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	前期
S6	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	前期
S7	花がたみ	1915(大正4)年頃	松伯美術館	前期
S8	風俗	制作年不詳	松伯美術館	後期
S9	お茶を運ぶ娘	制作年不詳	松伯美術館	後期
S10	お茶を運ぶ娘	制作年不詳	松伯美術館	後期
S11	長刀を使用する女性	制作年不詳		前期
S12	女性（上半身）	制作年不詳		後期
S13	三つの女性の顔	制作年不詳		前期
S14	舞妓の顔	制作年不詳	松伯美術館	前期
S15	舞妓	制作年不詳	松伯美術館	前期
S16	舞妓	制作年不詳	松伯美術館	前期
S17	蛍	制作年不詳	松伯美術館	後期
S18	蛍	制作年不詳	松伯美術館	後期
S19	深雪	制作年不詳	松伯美術館	前期
S20	深雪	制作年不詳	松伯美術館	前期
S21	手	制作年不詳	松伯美術館	前期
S22	娘の顔	制作年不詳	松伯美術館	前期
S23	九条武子夫人、横顔	制作年不詳	松伯美術館	後期
S24	九条武子夫人	制作年不詳	松伯美術館	後期
S25	月蝕の宵 一	制作年不詳	松伯美術館	後期
S26	月蝕の宵 二	制作年不詳	松伯美術館	後期
S27	冨勇 一	制作年不詳	松伯美術館	前期
S28	冨勇 三	制作年不詳	松伯美術館	後期
S29	能面 一	制作年不詳	松伯美術館	後期
S30	能面 二	制作年不詳	松伯美術館	後期
S31	能面 三	制作年不詳	松伯美術館	前期
S32	能面 四	制作年不詳	松伯美術館	前期
S33	序の舞　島田	制作年不詳	松伯美術館	前期
S34	日舞を舞う女性	制作年不詳		後期
S35	母と子	制作年不詳	松伯美術館	前期
S36	座る老人	制作年不詳		後期
S37	老人	制作年不詳	松伯美術館	後期

〈作品解説〉

5、7《人生の花》 1899(明治32)年　＊作品番号5は後期展示

これから婚礼の場に向かおうとする花嫁と、付き添いの母の姿を描く。そっとうつむいた花嫁の顔からは、恥じらいと不安、喜びが入り混じった心情がうかがえる。着物や帯の質感が巧みに表わされている点にも注目したい。

17《長夜》 1907(明治40)年

行燈に火をともす女性と、草紙本を読みふける女性。秋の夜長を楽しんでいる情景である。おっとりとした顔立ちは、上方の浮世絵師である西川祐信(すけのぶ)の美人図を思わせる。松園が人物表現の研究のために浮世絵を学んだことを表わす一例である。

21《人形つかい》 1910(明治43)年

本作品の題名は《人形つかい》だが、人形つかいの姿は描かれていない。襖を開いて部屋の中を覗き込む女性と、室内の人々の視線の向きから、襖の向こうで人形芝居が行なわれていることが暗示されている。

31《花がたみ》 1915(大正4)年

謡曲「花筐(はながたみ)」の登場人物・照日の前(てるひのまえ)が、愛する継体(けいたい)天皇を想って狂い舞う姿を描く。愛する人を想うあまり正気を失うという心理状態を表現するために、精神病院に取材に行くなどして研究した。

33《焔》 1918(大正7)年　＊後期展示

謡曲「葵上(あおいのうえ)」に取材した作品。光源氏のもと恋人・六条御息所(ろくじょうのみやすどころ)は光源氏の正妻・葵上に嫉妬し生霊となってしまう。顔の表情、髪の毛をくわえるポーズなどによって、執拗な嫉妬の念が表わされている。

39《伊勢大輔》 1929(昭和4)年

三十六歌仙の一人・伊勢大輔が、自身が仕える中宮彰子の前で「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな」と詠んで桜を差し出す場面である。王朝ものから取材した松園の作品は数少ない。装束の精緻な表現も見どころである。

41《天保歌妓》 1935(昭和10)年

堂々とした立ち姿の芸妓。彼女の顔の表情には、芯が強く意地のある性格がにじみ出ている。松園は、女性の美しさやなまめかしさよりも、意志の強さを描き出すことを好んだ。

46《雪月花》 1937(昭和12)年　＊11月2日-11月14日に展示

雪月花とは、白居易の詩にある「雪月花時最憶君」という句から成り立った画題で、古くから好まれたもの。大正天皇の皇后(貞明皇太后)より依頼を受けてから21年を経てようやく完成した。

47《草紙洗小町》 1937(昭和12)年　＊後期展示

謡曲の「草紙洗小町」に登場する小野小町を描いたもの。松園の謡曲の師匠・金剛巌が舞台で演技する姿から想を得た。舞台姿のうち、顔だけを能の面から生身の人間の顔に置き換えて表わしている。

48《砧》 1938(昭和13)年　＊前期展示

謡曲「砧」に取材したもの。都へ上りなかなか帰らない夫への想いを、砧を打つ音に乗せて夫のもとへ届けようとする一瞬を描く。静かな立ち姿ではあるが、彼女の表情には、夫を恋い慕う気持ちがありありと表われている。

59《母子》 1934(昭和9)年

幼子をしっかりと抱き、愛情に満ちた眼差しを注ぐ母親。明治初期頃の京都・中京あたりの良家の人物か。本作品を制作する数ヶ月前、松園の制作活動を長年支えてくれた母が歿した。本作品には、失われゆく古き京の町の面影と人々の営み、亡き母への想いが込められている。

61《鴛鴦髷》 1935(昭和10)年

鴛鴦髷(おしどりまげ)は、二十歳前の若い娘が結う髪型。合わせ鏡をのぞき込み、髷の出来を気にしている姿がかわいらしい。娘の服装は江戸末から明治初期に流行したもの。古き良き時代を懐かしむ松園の想いが込められている。

71《夕暮》 1941(昭和16)年

日が暮れゆくなか、陽光を求めて障子を開け、針に糸を通そうとする女性の姿。松園は幼い頃、母のこうした姿をしばしば目にしたという。本作品をはじめ、昭和期に描かれた市井の生活を主題とする作品にも、母への思慕の念が込められている。

77《序の舞》 1936(昭和11)年　＊前期展示

仕舞の一つである序の舞を舞う女性。彼女の姿勢や顔の表情から、精神を集中させて演技に取り組んでいる様子がうかがえる。強い意志を内に秘めたこの女性像を、松園は「私の理想の女性の最高のもの」と述べている。

79、80《鼓の音》 1938(昭和13)年、1940(昭和15)年

京都の裕福な町屋の令嬢が鼓の稽古をしているのであろうか。画面に女性だけを配し安定した三角形構図の中に収めて、下に振り下ろした右手だけに動きをもたせることで、これから鼓を打とうとする一瞬の緊張感を表わしている。

◎会場内での写真撮影はご遠慮ください。
◎作品保護のため、照明を暗くしております。